

令和4年度（2022年度）第2回放課後活動推進協議会

発達障がいの基礎知識と支援について

期日：令和4年（2022年）11月9日（水）

会場：オンライン会議システムによる遠隔実施

渡島教育局教育支援課義務教育指導班

はじめに

内容

- 障がいの捉え方と二次的障がい
- 発達障がいのある子どもへの支援の
ポイント
- まとめ

障がいの捉え方と二次的障がい

発達障がいについて

それぞれの障害の特性

- 言葉の発達の遅れ
- コミュニケーションの障害
- 対人関係・社会性の障害
- パターン化した行動、こだわり

知的な遅れを伴うこともあります

自閉症

広汎性発達障害

アスペルガー症候群

- 基本的に、言葉の発達の遅れはない
- コミュニケーションの障害
- 対人関係・社会性の障害
- パターン化した行動、興味・関心のかたより
- 不器用（言語発達に比べて）

注意欠陥多動性障害 AD/HD

- 不注意（集中できない）
- 多動・多弁（じっとしてられない）
- 衝動的に行動する（考えるよりも先に動く）

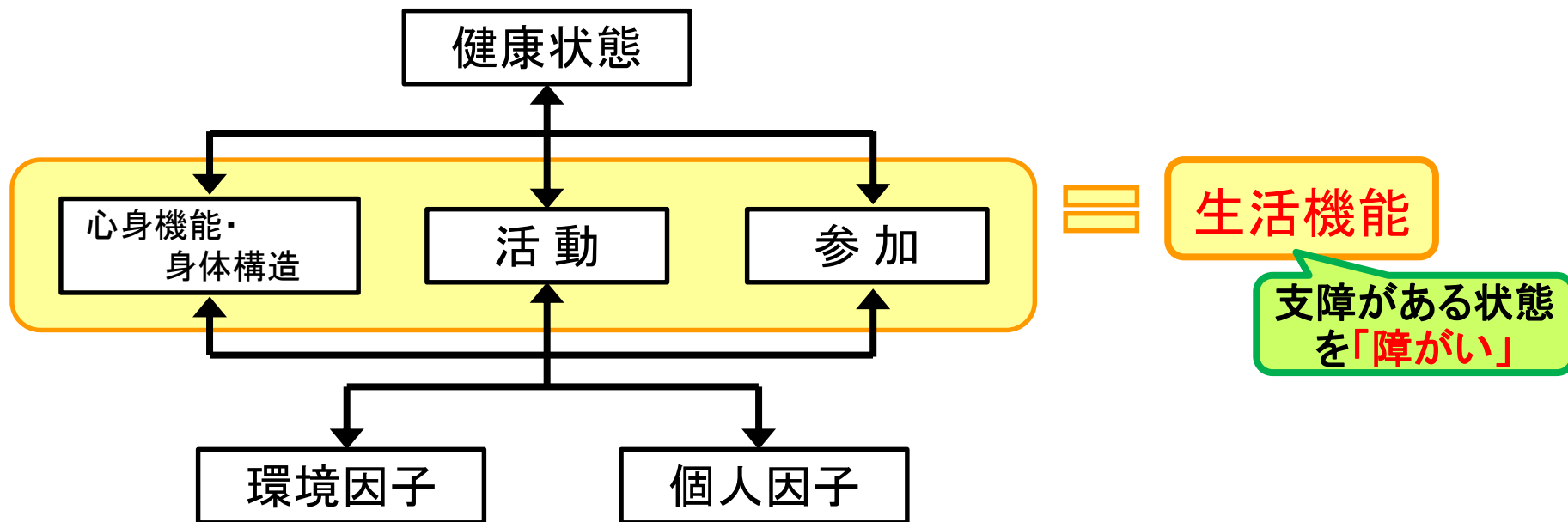
学習障害 LD

- 「読む」、「書く」、「計算する」等の能力が、全体的な知的発達に比べて極端に苦手

※このほか、トゥレット症候群や吃音（症）なども発達障害に含まれます。

障がいの捉え方

❖ 構成要素間の相互作用の図



発達障がいとは生活障がい

発達障がいをもつ人は生活者である。

発達障がいをもつ人は、生活という関係性の中で、周囲を困らせているように見える。

しかし、発達障がいをもつ人は、生活することそのものに途方に暮れ、困惑し、不安がり、傷付き困っている。

私たちが臨床という場で向き合っているのは、まさに発達障がいをもつ人が示す生活の難しさ、暮らし下手、生きづらさであり、同時に発生する心の痛みなのである。

生活障がいとしての発達障がい

[図 1]



[図 2]



ある小学校の取組

Aさんの状況

- ・ ADHDの診断がある。
- ・ 学校で特定のグループにからかわれ、いじめられていた。
- ・ 両親の仕事の都合で、1年間別の土地で生活することになった。

ある教師の関わり

- ・ 転校先の学校の教師は、両親に「ADHDという特性への対応よりも、今、この子に必要なことは自信をもつことです。」と話した。
- ・ Aさんもこの教師に励まされ、自分の言葉で自己主張することを学んだ。

Aさんの変化

- ・ 1年後、元の小学校に戻ったAさんは、早速、いじめられていた特定のグループに取り囲まれ、Aさんがかけていた眼鏡をけなされたが、Aさんは「私、この眼鏡が好きなの。」と言い、毅然とその場から離れた。

ライフステージから診た二次的障がい

乳幼児期

- 【特性】夜泣き、偏食、拒食、抱っこの嫌がり
- 【養育者】育てにくさ、自責の念、怒り、失望、孤立感
- 【本人】不安定な愛着関係、漠然とした不安感、養育者を追い詰める言動

保育・学童前期

- 【特性】上手にできない、じっとしていない、乱暴な言動
- 【関係者】集団に馴染ませたい、善意の叱責、低い評価
- 【養育者】批判の対象、自信喪失
- 【本人】不安、緊張、睡眠や排便への影響、爪かみ、抜毛、意思表示の封印、集団参加の拒否

ライフステージから診た二次的障がい

学童後期（小学校高学年、中・高校）

【本人】 周囲と自分の差異、できないことの自覚、自己評価の低迷、現実からの回避、自分だけの世界、生活リズムの乱れ、集団生活からの完全撤退、ゲーム依存症

不登園・不登校

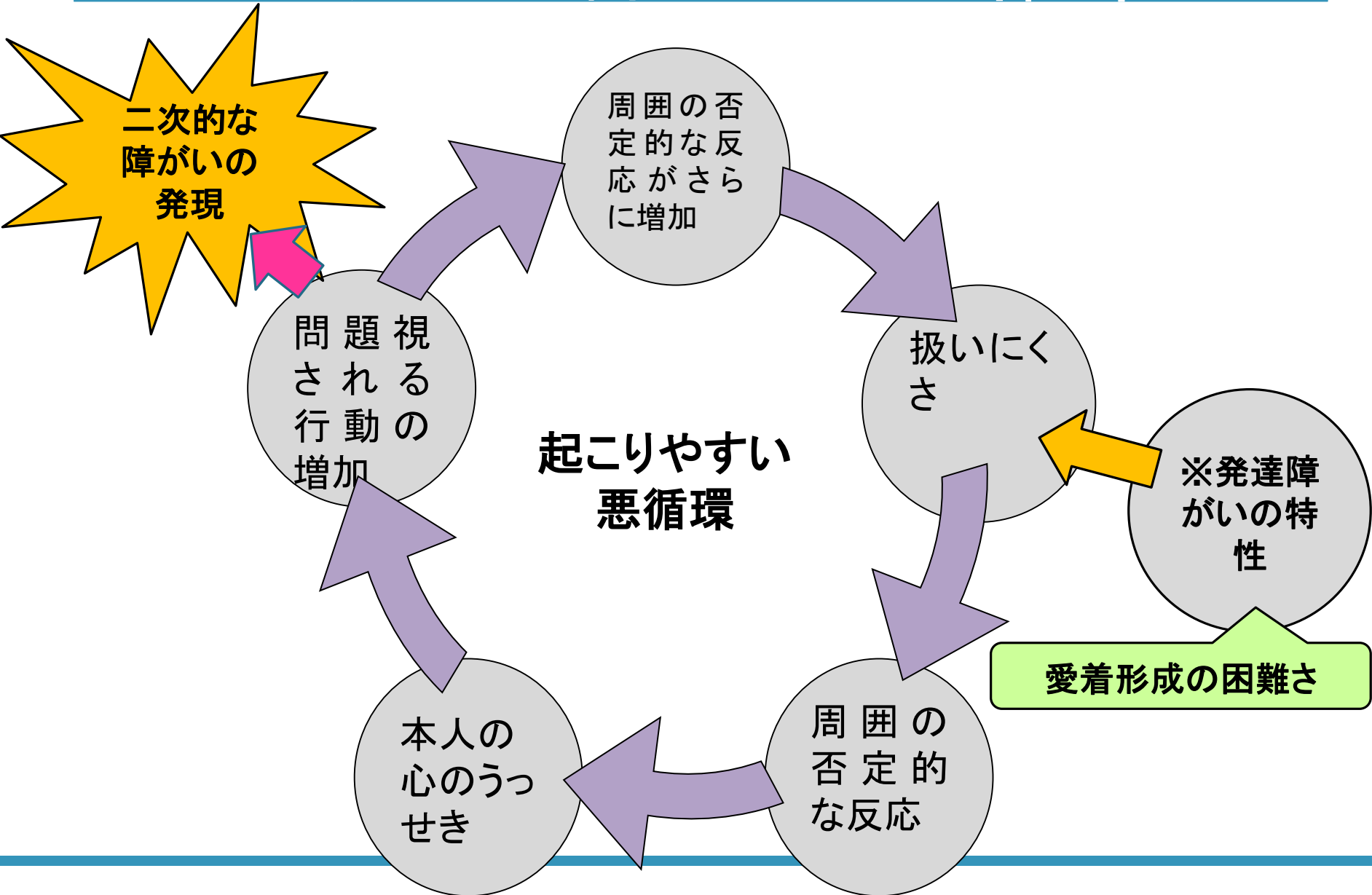
【特性】 対人関係のつまずき、学習の取組の大変さ、感覚刺激の耐えがたさ

【関係者】 不安、苛立ち

【養育者】 本人の辛さの理解、遅れることの不安、将来の心配、動揺

【本人】 集団不参加、不登園、不登校

二次的な障がいの悪循環



発達障がいのある子どもへの 支援のポイント

発達障がいのある子どもへの支援のポイント

1. 支援の必要性に気付くこと
2. 実態把握をして支援ニーズを明確にすること
3. できる支援から始めること

1. 支援の必要性に気付くこと

- 「困った子ども」は「困っている子ども」
- 本人の意思では「変われない」可能性
- 「努力してもできない」ために「一層意欲をなくしている」

2. 実態把握をして支援ニーズを明確にすること

- これまでの経過について情報を収集し、どのような支援が必要なのか検討
- 本人ができていることや努力していること、わずかでも進歩したこと、本人が認めてほしいと思っていることなどを積極的に見いだして把握することが必要

2. 実態把握をして支援ニーズを明確にすること

- これまでの経過について情報を収集し、どのような支援が必要なのか検討
 - ✓ 学校や家庭での様子との比較
 - ✓ 学校や家庭での対応について確認

2. 実態把握をして支援ニーズを明確にすること

- 本人ができていることや努力していること、わずかでも進歩したこと、本人が認めてほしいと思っていることなどを積極的に見いだして把握することが必要
- ✓ 「できないこと」だけではなく、よさなどにも注目

2. 実態把握をして支援ニーズを明確にすること

しつこく話しかけてくる子ども

- ・人好きな子ども
- ・積極的にかかわろうとする子ども

次々と興味が変わる子ども
落ち着きのない子ども

- ・様々なことに興味を示す子ども

動き回る多動な子ども

- ・体を動かすことが好きな子ども



子どもの「よさ」は、肯定的に見ることで気付くことができます。

3. できる支援から始めること

- 支援の必要性があると気付いたら、早期にできる範囲で支援を開始すること
- 二次的障がいの出現や増強を防ぐ対応を行うこと

3. できる支援から始めること

Bさん



— 特徴 —

指示の理解や見通しを立てることが難しい
Bさんの場合

困難さ

「指示理解」の困難

- ・複数の指示を一度で理解できない



「見通し」に対する困難

- ・予期せぬ出来事が苦手
- ・予定の把握が難しい



支援の具体

「指示理解」への配慮

- ・指示は一つずつ伝える
- ・手順を図や数字で示す

「見通し」への配慮

- ・一日の予定を紙に書いて机に置く

支援の工夫

<分かりやすい言葉がけ>

- 本人の分かる言葉で、短く、具体的に伝える

きれいにぬってね

線からはみ出さないようにぬってね

フタをしめてね

カチツと音がなるまでしめてね

ちょっとまってね

5分、待ってね



まとめ

まとめ

- 子どもが「やらない」ではなく、「できない」可能性を考え、対応すること
- 対応は、できる範囲で、早期に行うこと